

近畿農政局長賞

能座集落（兵庫県養父市）



(株)Amnak による酒米の田植え

(概要)



蘇った能座集落の棚田

住民はコシヒカリ、会社は酒米の栽培

(1) むらづくりの動機・背景

養父市能座集落は兵庫県北部の但馬地域の中央に位置し、全域過疎地域に指定され、超急傾斜の農地が広がる集落。高齢化率は49.43%と限界集落の一手前で、農地だけではなく集落を維持するのが困難な状況である。

能座集落は「農地を守ることが集落の景観、村を守ること」を決意し、多面的機能支払交付金や中山間地域等直接支払交付金など各種補助事業を活用し、対象農地をしばり込み、農地保全に取り組んできた。地権者では保全作業ができない農地については、集落の女性や「能座地区地域資源保全隊」が積極的に保全活動を行った。しかし、状況は年々悪化し、能座地区の農地16.6haのうち約7割が耕作できなくなった。

平成26年に国家戦略特区（中山間農業改革特区）に指定されたことが転換期となり、企業参入による農地保全に結びつけた。(株)Amnakの農業参入に当たっては、国家戦略特区の農業生産法人における役員要件の緩和を活用した。能座集落4名が役員となり、集落と企業の調整役を担っている。能座集落では、対象農地の選定に当たっての地元調整、耕作準備作業（石拾い、草刈り、獣害柵の設置など）を参入企業と共同作業で行い、耕作放棄地を解消した。

(2) むらづくりの内容

能座集落では、昭和63年より機械化による農作業の省力化を図るため、ほ場整備を実施したが（平成6年完了）、法面が大きな農地が数多くなり、高齢化に伴い長大法面の草刈りなど、農地維持に苦慮していた。

能座集落では、集落農地周りが荒廃していく中で「このまま何もしなければ農村は消滅してしまう。」との考えから、国家戦略特区に取り組んだ市行政の思いと地域の思いが、更に、参入事業者の思いが一致し、国や県と連携の下で展開している参入事業者を活用した地域づくりが進められている。耕作放棄地が増加する中で、企業参入による耕作放棄地で酒米づくりが展開されているなど、集落・企業・行政が三位一体となって、むらづくりを進めた事例であり、中山間地・限界集落における新たなむらづくりの形である。